



彼^{かれ}主^き役^{やく}に^にな^なれ^れな^ない^い
彼^{かれ}女^{にょ}に^に捧^たぐ^ぐ
^{かのじよ}

著 ひーらぎ
イラスト 六夏

主役になれない彼彼女に捧ぐ

ひーらぎ

登場人物紹介

島崎海斗（しまざき かいと）

…市立渋木第一高校二年三組帰宅部。本作の主人公で幼馴染の夏希との差に列島感を抱いている普通の少年。

双海彩葉（ふたみ いろは）

…市立渋木第一高校二年三組帰宅部。謙也の幼馴染でありとにかく地味で目立たないお下げな少女。

立花夏希（たちばな なつき）

…市立渋木第一高校二年三組で生徒会役員。海斗の幼馴染でモデルのようなグラマーボディは女子の憧れで男子の夢とされている。

神崎謙也（かんざき

けんや）

…市立渋木第一高校二年三組帰宅部。彩葉の幼馴染で昔は多少ヤンチャしていた。今は丸くなりだらしなく高校生活をエンジョイしている。

第一章 主役になれない彼女の夏休み

1

彼女と始めて会ったのは冬のなんでもない日。それこそ水曜日の昼過ぎ、五限目が始まる少し前だった。寒いはずなのに止まらない汗を拭って、目の前へ伸びる特別校舎までの道を見やる。いつもならなんでもない距離なのに、歪む視界と永遠の微睡みに取り残されたような思考の中じゃ、砂漠のど真ん中を歩くような絶望感しかない。

「ちよつと無理かも……」

壁に手をつけて上がった呼吸を整えていると、背後からその声はした。

「大丈夫？」

こんなとき、もし自分が物語の主人公なら、美人の先輩や金髪碧眼の留学生、はたまた親同士が勝手に取り付けた許嫁に出逢うものなのだろう。しかし、島崎海斗の元へ現れたのは、数日経てば顔も忘れてしまいそうな地味な少女だった。唯一ある特徴である左右へ揺れる二つのお下げが余計に地味さをより強調してしまっている。だが、それでも海斗がその少女に救われたことに変わりはない。

心配そうに二重の瞳を揺らしながらその少女へ肩を取られた海斗は、情けなさを悟らないように平然を装って首を振った。

主役になれない彼女に捧ぐ

「ちよつと目眩しただけだから。平気」

海斗は掴まれた腕を申し訳なきそうに返してゆっくり身体を起こした。寒いはずなのに、止まることなく額へ滲む汗を袖で拭つて浅く長い呼吸を一つ。

「ありがと。おれのことはいいから授業行つて」

「えつ、で、でも……」

「平気だから」

海斗は少しでも身体へのしかかる気怠さを振り払うように何回か深呼吸を繰り返して、平気な顔で一步を踏み出す。上履きの底が廊下を踏み締める度に足から筋肉が叫ぶような痛みが走って片目をしかめる。が、隣で心配そうな顔で着いて来る彼女がいる限り弱音を吐くわけにはいかない。すぐ真横の壁が恋しい、そう思いながら足を動かしていると

「やっぱ保健室まで連れてく」

「ただの風邪だから」

「じゃなくて、他の人に感染するかもしれないでしょ？」

突き放すような口調には返す言葉もない。されるがままに腕を掴まれた海斗は、繋がった右手を見つめながら会話もない廊下に足音を響かせる。半歩先で動く背中は見えた目とは裏腹に気が強そうで、地味だった印象が一時的に書き変わる。しかし、保健室のベッドへ寝かされて、去り際に見た彼女の横顔はやはり地味なままだった。なのに、どういいうわけか目を逸らすことができなかつた。

せめて名前だけでも——と重い瞼をなんとか持ち上げながら唇を動かす、

「えっと……あ、ありがと。き、キミは」

そう言いかけたが最後は声になっていたか非常に怪しい。くすりと微笑んで扉へ手をかけた少女は最後までこちらを向いたまま、

「ちゃんと寝てないとダメだよ」

ひらひらと手を振られた。すぐに保健室の戸が閉まり、保険教諭の作業音しか聞こえなくなる。すぐに瞼が視界を閉ざし、最後に思ったのは、名前も知らない彼女の笑い顔。

——名前、聞けなかったなあ。

その後悔は口から漏れていたのかどうなのか——その答えは夢の中へ沈んでいった。

2

窓を挟んでもうるさく聞こえてくる蝉時雨がやる気の欠片もない扇風機に喝を入れるよう教室内をより暑く感じさせた。窓際の自席から見えるグラウンドには野球部とサッカー部が灼熱の太陽と我慢比べの最中で、野太い声が余計に暑苦しい。正直自分には無理だと欠伸を噛み締めて練習風景をぼんやり眺めていると、教室端から潰した上履きの音が近づいて、正面で止まった。

「いつまでそうしてんだよ。飯行こうぜ」

小麦色の肌と短い金髪、鋭い双眼が肉食獣を思わせる神崎謙也が気怠げな溜息を零しながら正面の席へ寄り掛かっていた。片眼で校庭を映す謙也が胸の前で腕を組んで、

主役になれない彼女に捧ぐ

「数学の田中、怒ってたぜ。補修なのに堂々と居眠りするなって」

「その言葉そのまま返してあげるよ」

「そりゃ寝るだろ」

カラカラ笑いながら口端へ残る居眠りの証拠を拭い、

「飯」

「購買？」

「ああ。金ねえし」

「バイトすれば」

「……貧乏学生も青春だろ」

目を逸らした謙也がわざとらしく歩幅を広げて一足先に教室を出た。その後を追って海斗も廊下へ飛び出る。

八月上旬。夏休みに入って二週間が過ぎた。

大半の運動部が世代交代を済ませており、新チームで新しい目標に向かい始め、三年は残りの学生生活を惜しむように過ごして将来を見つめる。そんな変化の季節とも呼べる夏だが、帰宅部二人の日常には一つとして変化がなかった。

後ろ向きに考えれば何一つの進歩もない停滞。

前向きに捉えれば平穏な日々が続いていく安定感。

海斗はそんな日常が嫌いじゃなかった。

例え毎日補修でも。週五で学校でも。夏休みの課題の他に別の課題が上乘せされていたとしても。だが、それに不満を漏らす人間は必ずいて、

「なんでこんなクソ暑いのに毎日学校来なきゃいけないんだよ」
棒アイスを口へ突っ込んで謙也が長い溜息を零しながら、窓で切り取られた真つ青な空

を仰いだ。こんなにも天気がいいのに毎日勉強漬けなのは確かに勿体ない。なんだか学生生活を無駄遣いしている気もしてしまう。が、文句を言う資格もない。故に海斗は苦笑を滲ませて、溜息に肩を揺らした。

「赤点連発だからだよ。おれもだけど」

溜息に肩を揺らした。すると、謙也はアイスの棒を口で動かしながら、楽しげな笑顔を弾ませて校門へ向かう生徒を捉えた。部活帰りだろうか？ これから遊びにでも行くのだろうか、それが余計謙也のテンションを地の底へ落とした。

「でも俺ら高校生だぜ？ 一度きりの高二の夏休みに補修って。今しかできない事とかやるべきだと思うんだよな」

「……海でも行く？」

「野郎二人でか？」

ふざけるな、と鼻で笑われる。しかしそれには完全同意で、

「……華がないね」

「だろ？ ナンパするにもお前みたいなもやしじゃ敵しいと思うぜ？」

「余計なお世話だよ」

大きくなりかけた声がどこから吹き込んできたのか知れない熱風で静まっていく。最後にはだらし無い吐息が漏れて、じとりと汗で濡れる額を袖で拭いた。

「早く教室戻ろ。暑くて死にそう」

「ああ……あつ」

「謙也？」

急に間拔けな声を漏らした謙也を半身で振り返る。食べ終えたアイス棒の両面を確かめるように何度もひっくり返し、太陽へ透かしていた。

「ハズレだ」

砂漠を吹き抜ける乾いた風のように呟いて、手近なゴミ箱へ放り投げた。

ゴミ箱へ入った軽い音を横に、謙也はここからじゃ見えない校舎最上階の生徒会室を覗くように見上げた。

「そういうや……夏希は来てねえのか」

「多分いる。夏休みもやることあるって言ってたし」

「ご苦労なこつて。なら行き先は決まったな」

謙也の含みがある笑い顔へ小さく頷いて、二人は差し掛かった階段へ足をかけた。自分の教室がある三階を素通りして六階へ。ほとんどの教室が教材置き場と化しているこのフロアはほとんど生徒が寄り付かない。用のある生徒とさえ、吹奏楽部か生徒会役員だ。なんでも、楽器同士の音が混ざり合うのを防ぐため——らしい。

二人は低音楽器が引つ掻くように空気を震わせるのを聴きながら、フロア最奥部の生徒会室前へ立つ。ひとつ前の空き教室から線を引いたように吹奏楽部の生徒が姿を消し、遠くなる音に紛れてボールペンの走らせる音が聞こえてきた。

「いるね」

「ああ。夏希、入るぞー」

戸へ伸ばしかけていた海斗の腕が押し退けられて、半歩後ろを歩いていた謙也が躊躇いなく扉を開け放った。ガラツ、と威勢のいい音と共に逃げ道を見つけたエアコンの冷風が一気に押し寄せて廊下へ溶けていく。心なしか吹奏楽部の演奏が軽やかになったようだ。

「夏希ー？」

謙也が躊躇うことなく生徒会へ踏み込もうとするのだから、咄嗟に海斗が腕を掴んで引き止める。「んあ？」と僅かに首を捻る姿は本当に何が言いたいのかわかっていないらしい。「勝手に入るのはダメでしょ。ほかの役員いたらどうするのさ」

「海斗の言う通り。なにか用？」

入口から見て視界右側へ向かい合って並ぶ業務用デスク。壁を背にした奥の席から立花夏希の呆れた吐息が冷風に乗ってくる。ボールペンを机に転がして、両肩を隠す焦げ茶色の髪を払うと、涼しげな頬笑みを作る双眼が途端にめんどくさそうに瞬きした。長いまつ毛が大きな瞳を隠して数秒、

「で、なに？」

吐息をたっぷり含んだ気怠げな声を吐く。歓迎されてないことだけがわかり、嫌味を言われる前に帰りたくなってしまった。しかし既に半步入室している謙也が引き返すとは思えず、海斗は肩を落として、

「ちよつと用があつて……」

謙也の腕を離して苦笑を滲ませる。「入っていいか？」と首を捻った。

「いいけど……どの備品壊した？ 蛍光灯？ 窓ガラス？ どうせ謙也くんがやったんでしょ？ ちよつと待ってて」

妙に慣れた口調で席を立つと、ぐるつとデスク正面の資料棚へ立った。背伸び気味に棚からファイルを取り出して、関連書類を探し始めた。

「いや……俺にも壊してねえよ」

謙也の渋く抑えた声へ手を止めた。

「ほんと？」

「何も壊してないし……そういう用事じゃないから」

海斗が苦笑のまま頷く。「なんだあ、そうなの？」と安堵したような声でこちらを振り向いた夏希がこれでもかと膨らむブラウスの胸元にファイルを抱いた。

「じゃあなに？ 生徒会の仕事手伝ってくれる……わけないよね」

「あ、う、うん……。えっと」

素直に生徒会室でだらけさせてくれ、なんて言ったらいくら幼馴染でも怒るよなあ——
なんて思いながら言葉を考えていると、

「超大事な用だ」

謙也が鬼気迫る声色で切り出した。これなら夏希も話だけでも聞いてくれるはず、と期待を込めて夏希を見やる。しかし、興味ないとばかりに胸へ当てていたファイルに目を落としていた。

「なんでもいいけどあたしも暇じゃないから手短かにね」

取り付く島がないとはこのことだ。それでもチラリと片目を向けてくれる夏希は間違いなく優しい。何を言おうとしているのか海斗が謙也の背中を叩く。任せろ、と親指を立ててられた。そんな自信アリげな顔をするのだ。秘策があるのだろうか、と海斗は信じるように謙也へ頷いた。が、

「ここで昼飯食わせてくれ」

そんな海斗の期待は馬鹿と叫びたくなるほどストレートな言葉で打ち砕かれた。海斗は項垂れるように額を抑えて溜息する。その溜息は夏希の物と綺麗に重なり合い、呆れて笑うことさえできない視線が二人を突き刺した。

「役員でもないのに認められるわけ無いでしょ？ まさかいけると思った？」

冗談だよ、と言いたげに片眉を引き攣らせて、自席へ戻る。ボールペンの走る音が再び聞こえ始め、それから夏希の瞳は書類だけを映し始めた。こうなつては無理だ、と海斗は謙也の肩を叩いて首を振る。

「戻ろ、謙也」

「ここで戻っても仕方ないだろ。夏希」

「……まだなにかあるの？」

「彩葉も来てるんだろ。カバンあるし」

顎でしゃくった先は夏希の隣席と夏希の足元。それぞれにスクールバッグが置いてあった。謙也はその一つ、椅子へ乗ったカバンを訝しむように見てから、

「そのカバン、彩葉のだろ？」

と、首を捻った。しかし、夏希の態度は変わらず「それがなに？」とばかりにペンが休みなく動いている。

「今コンビニに行ってるけど」

「アイツも部外者だ」

「いろりんは手伝ってくれてるからいいの。謙也くんも手伝ってくれるならここでお昼食食べてもいいけど」

ジト目でコチラを見やっと思えば、再び呆れたような溜息をして書類へ目を落としてしまった。サラサラと小気味いいペンの音が聞こえる中で、

「期待してないけど。海斗ならまだしも、謙也くんは字、汚くて読めたもんじゃないし」
邪魔しないですよ、と夏希が短く言葉を区切った。それっきり続く言葉はなく、謙也が眉を寄せたような顔でこちらを向いた。

「どういうことだよ、海斗」

「静かにしろ、だって」

「俺らは快適な昼飯を約束されたってことか。そんじやあ陽が落ちるまでここで快適に過ごさせてもらうわ」

ははは、と豪快に笑うや、ドカドカと生徒会室へ入り込んで夏希の正面へ腰を落とした。チェアのホイールと背凭れが軋む音に夏希がギロリと眼を剥いた。しかし謙也がそれを気にする様子はない。海斗は申し訳なさを誤魔化すように、デザートに食べようと思っていたプリンを夏希へ差し出した。謙也の隣へ腰を下ろす。

「急に押しかけたりしてごめん。それ食べて機嫌直して」

「別に不機嫌なわけじゃないけど……貰つとく。最初からここ来る気だった？」

「最初は考えてなかったよ。暑かったし夏希来てたなーとか思い出して」
微苦笑を携えながら購買で買った弁当を口に運ぶ。こんな気温でもご飯は温かくないと食べたくないのはどうしてか、なんて考え始めていると、

「プリン、ありがと」

ペンを止めて夏希がこちらを見やる。海斗は困ったような笑顔でプリンを掲げた夏希へ頷きながら目を細める。すると、

「戻ったよ」

気の抜けるふわりとした少女——謙也の幼馴染、双海彩葉の声が心地よく響く。

謙也と夏希がパツと彩葉へ意識を向ける中、海斗だけがワテンポ遅れて首を回した。低い位置で結んだお下げが楽しげに踊り、あの冬の日を忘れられないものとした柔らかな笑顔で歩んでくる。片手には学校近くのコンビニのロゴが入った袋があり、

主役になれない彼彼女に捧ぐ

「冷たいうどんとパスタどっちがいい？」

夏希の隣に座ると飲み物と別に広げた。

「うどんかな」

「はあい。島崎くんたちも来てたんだ。補修終わり？」

「今日は午前中だけだから。謙也がここで涼みながらお昼食べようって」

「エアコンこしかないもんね。わたしも涼みながら宿題やろうかなって作戦だったし」
てへ、と舌を見せたイタズラな微笑へ反射的に目を逸らして、平静を装うように弁当を口に運ぶ。味が鈍ったような気がして居心地が悪い。冷風を浴びても冷めない頬の熱はあの冬の日に感じた暑さと少し似ていて、思い出すだけで恥ずかしさがこみ上げる。

特別可愛いわけでも、胸が大きいわけでもない。

特筆した特徴がないのが特徴の彩葉にどうしてここまで心は掻き乱されるのか。

どうしてこんなに踊らされているのか、箸を止めて思考に耽る。いつも記憶が立ち止まるのはあの冬の日。間違はなくあの日、良くも悪くも自分の人生は大きく変わった。

何がどう変わったかはわからない。唯一わかるのは、この気持ちを自覚してしまつたら、二度と後に引けなくなる、そんなことだけだ。

今できるのは目を逸らすこと。

主役になれない自分はそうすることでしか今を保つことはできないのだから――。

二つお下げの少女と再開したのは二年に進級してクラスが変わったその日だった。

あの日以来話したことも無ければ名前も知らなかった。そんな彼女、恩人との再会に、海斗はほぼ初対面なのも忘れて、彼女の席へ足を向けていた。

「あ、あの……！」

緊張でカラカラに乾いた唇が精一杯の音をたてる。

友達と話していた彼女が「はい？」とお下げを靡かせてこちらを向いた。街中で見知らぬ男に道を聞かれたような顔で首を傾げた。

「えっと……誰？ わたしに用、かな？」

「あ、うん。なにか言えればいいかな。えっと、お、おれのこと……覚えてる？」

再会して何を思い上がってるんだ、とわかつてはいても口が考えなしに動き出す。

彼女の友達が微妙な顔で笑う中、眼前の少女は緩い笑顔のまま頷いてくれる。普通は気味悪がつて友達もろとも席を離れるのに。

「そうだなあ……」

と彼女が考え込んで数秒。気づけば友達数人は自分の席へ戻っており自分と彼女、一対一の会話となっていた。

「どこかで会ったんだよね」

「えっと、うん。去年の、一年の冬に下駄箱あたりで」

「下駄箱……部活は？」

「帰宅部」

「わたしも。えつとクラスは」

「三組」

「わたし一組」

どこで会った？ と反対に首を捻った。

しかし、中々答えが彼女と巡り合ってくれない。そのうち考えるのを止めたように顔を上げて「ごめん」と両手を合わせて少女が苦笑する。

それで終わりではなく、わざわざ席を立てて右手を差し出してきた。

「ここで話したのも何かの縁でしょ？ 思い出すかもしれないし……わたしは双海彩葉

「えつと……おれは」

それが彩葉との本当の出会いであり——胸にはびこり始めた最初のモヤモヤだった。

心地いい夜風へ遊ばれながら聞こえてくるセミの鳴き声に、いつの間にか降りていた瞼をゆっくり持ち上げた。真つ暗な視界へ映る見慣れた天井をぼんやり見つめながら瞬きを繰り返して意識を覚醒させていると、

『オイちゃん、ご飯だよ。寝てるの？』

決定打となった妹、梓沙の声がノックと共に聞こえてきた。

欠伸を噛み締めながら起き上がり、扉を開ける。ふわっ、と真つ暗な部屋の入口へ明るい光が落つこちて、海斗は腕で目を隠した。

「ごめん、寝てた」

「なんか静かだからもしかしたら思って思ってたけど。ご飯できたし早く降りてきて」

胸板へ届きそうな背丈の梓沙が、片足へ重心を乗せながら腰へ手を当てた。主張が強そうな二重で垂れた瞳がじつと逸れずにこちらを向き、染めていない黒のポニーテール、その束ねた辺りから髪の毛が飛び出てあらゆる方向へ飛び散っていた。パツと思ひ浮かんだのがパイナップルの茎だ。年齢に比べて発育がいい胸元を数サイズ大きなエプロンがショートパンツまで隠しているのだから、裸エプロンのようだ。

まだ覚醒しきっていない脳内でぼんやり梓沙を見続けていると、

「まだ寝てる？ おねえ今日もあれで機嫌悪いから早く」

「えっ……また。めんどくさいんだよなあ」

「だから早くー」

痺れを切らした梓沙の手が脇腹を搔いていた海斗の腕を掴んでそのまま階段へ引つ張った。されるがままに海斗は階段を下りながら梓沙へ気付かれないように肩を落とす。

また姉の機嫌が悪い、と知っただけで足取りが異様に重い。

「怒るとめんどくさいんだよね……」

「だから早く夜ご飯にしたいの。おねえ、お腹空くと余計機嫌悪くなるんだから」

「大学生なのになあ……。仕方ないか」

主役になれない彼女に捧ぐ

やれやれ、と愚痴を零していると、

ピピピ、ピピピ、ピピピ。

ポケットに突っ込んでいたスマホがメールを知らせた。機械的に手を伸ばして画面に表示された文面に目を落とす。何より先に差出人の名前を見て詰まった息を漏らした。

「えっ……えっ、なんで？」

どうして、ただその疑問が頭に浮かんで仕方がない。この手の連絡は夏希が毎回送ってきてたのに——海斗が何回も確かめるようにメールを読み込んでいると、

「オイちゃん？」

正面を歩いていた梓沙が首だけを回して画面を覗こうとしていた。咄嗟にスマホを後ろ手に隠して、

「なんでもないよ」

曖昧な空笑いで誤魔化してみせる。が、文面の一部を見られたらしく梓沙が目ですつと細めて、

「怪しいなあ。誰から？」

「べ、別に夏希からだよ」

「じゃあどうして隠すの？ あっ、もしかして彼女!!」

きゃあー、と自分のことみたいにはしゃぐ梓沙へ溜息をつき、メールを打ち返してからポケットへしまふ。

「いるわけないでしょ」

「オイちゃん、イケメンじゃないけど普通の顔してるし可能性あると思うんだけどなあ」
「嘘でいいからイケメンって言ってくれ」

「……それはちよつと無理」

今の間はリアルだ。うん無理、と大事なことからしく復唱される。

「イケメンっていうのは、えーと。オイちゃんのお友達の色黒な人」

「謙也？」

「そうそう。けんや先輩みたいな人を言うんだよ。カッコイイのに彼女いないんでしょ？」

ねえ？ と梓沙が小首を捻った。確かに聞いたことはないが、好きな人は恐らくいて、

きつと彼女のことだ。海斗は一瞬浮かんだ彼女の顔を振り払うように頭を振って、「どうなの？」と袖を引いてくる梓沙へいたずらっぽく笑う。

「謙也のこと好きなの？」

「うーん、それはないかな。イケメンはこっちが緊張しちゃうもん」

あはは、と苦笑される。が、すぐに真面目な顔になって、

「オイちゃん……なんかあった？」

くりつと丸い瞳が僅かに揺らいだ。なにを見ているのか、なにを知っているのか。海斗はしばらく沈黙してから、絞り出すように、

「どうして？」

その質問がいい意味なのか悪い意味でなのか。梓沙が楽しげな笑い声を上げてるからいい意味と捉えていいのだろうか。

主役になれない彼女に捧ぐ

「最近楽しそうだからさ」

「高校生になるといろいろあるから」

「いろいろ、ねえ。オイちゃんにも春は来るんだね。頑張つて〜！」

胸の前で拳を作つて小さくジャンプ。夏希みたいに胸は揺れないが、エプロンとシャツが捲かれて健康的な肌色のお腹と形のいい細丸のヘソが覗いた。階段でジャンプすると危ないだろ、とよろけそうになる身体を抑えた途端、

「遅い」

ドスの効いた深い声が海斗を貫く。瞬間的に首を正面へ直すとロングと呼ぶには少し長さが足りないいい明茶色の髪をピンでまとめた女性が映る。

大学生の姉、沙織だ。

梓沙もこうなるといいな、と期待させる胸の前で腕を組み不機嫌にじつと睨み上げてくる。殺気を孕んでいそうな眼光へ苦笑しつつ梓沙から手を退かした。

「ご、ごめん、ちよつと寝ちゃつてて」

「寝てたならメールしなさいよ」

「無理だつて、寝てるんだし」

「それくらいどうにかしないさいよ、有り余る若さで！」

「むちゃくちゃ」

「うるさいわね！ さつさと手洗つて来なさいよ、これ以上待たさないで」
全く、とボヤいて足音を踏み鳴らしてリビングへ戻って行く。

扉が閉まったのを確認して、海斗は頬を掻きながらエプロンを直す梓沙へ引き攣り気味な視線を投げる。と、何も言わなくとも通じたように軽く頷いた。

「また男にベタベタ身体触られたんだって。男運がないというか、おねえがめんどくさがりなだけか」

「男に興味がないだけでしょ。最長で付き合えた人で六時間とか聞いたし」

どうしてまたこんな姉を好きになったのか。

決して少なくない歴代彼氏ひとりひとりへ聞いてみたい。しかしそれを知ったところで自分は絶対沙織に恋愛相談しないのだろう。

海斗は肩で溜息をして、鬼が待つリビングの扉を引いた。

「あつ、夏希？」

『ごめんね、こんな時間に電話して』

「別にいいけど。まだ起きてんだ」

夕飯を済ませていたら夏休みの課題と向き合っていた最中に訪れた電話へ苦笑して、机脇の窓から見える夏希の部屋へ目をやった。

『もう寝るけどこれだけ言っておかないとって思ってる。いろいろんからのメールは見た？』

「明日、水着持って来てってやつ？」

夕飯の少し前に着信したメールを思い出しながら言うと、電話口で鼻を抜けるような笑みが聞こえる。プールへ行くことに反対はないが、明日も明後日も明々後日も補修が入っているのだ。それが少し不可解で、

「明日補修だよ？」

一応確認してみる。知ってるよ、と返した夏希の笑い声をしばらく聞いてみると、

『まあ明日になってからのお楽しみでこと勘弁してよ』

「そう言われても……どこ行くかくらい教えてよ」

『すぐ近くだからさ』

「ま、まあ……近くならいいけど」

それなら補修後でも充分遊べるし——そう頷いてベッドへ腰を下ろす。スプリングの返しに従って仰向けに転がると、

『じゃあそれだけだから。寝るね』

「う、うん……？ あっそうだ」

本当に事務的連絡だったことに吹き出しながら喉の奥ですつと引かかっていた一つの疑問を口にしようとする。が、それより先に、

『もう限界！ おやすみ』

一方的に通話を切られてしまった。

主役になれない彼女に捧ぐ

逃げるような態度は何かあるに違いないのに、もう一度電話をかけようとする指が重い。海斗はしばらく暗転した画面を見つめ続ける。が、時計の針が天辺を通過したのを知り、パツと起き上がる。学習机に広がるテキストやらをカバンに詰め込みつつ、窓の外へ。

まだ夏希の部屋の明かりは点いている。厚手のカーテンの奥で彼女のシルエツトが動いているのに電話がかけられない。何に怯えているのか、何が怖いのか——海斗はその姿をしばらく見つめてからベッドへ飛び込んだ。

意識を遮断するように部屋の明かりを落として無理やり瞼を閉じた。

主役になれない彼女に捧ぐ

発行日

2015年8月14日 コミックマーケット88

発行者 よろづ屋本舗
<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>
yoroduyahonpo@gmail.com

著者名 ひーらぎ
<https://twitter.com/rag0311>

イラスト 六夏
編集 黒ねこ作

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。



よろづ屋本舗

【主役になれない彼女女へ捧ぐ】

この世界には主役と脇役がいる。

誰にでも人気がある幼馴染、立花夏希と共に
過ごし、そんな当たり前のことへ気づいた脇役の
島崎海斗は全てを諦めて生きるようになる。

しかしそんな海斗を変えたのは自分と同じ境
遇で生きる双海彩葉だった。彼女と触れ合い、主
役と脇役の狭間で苦しむ海斗は最後にな
んを見つめるのか。

有り触れた悩みを抱えながら少しずつ前へ進
む地味でひたむきな爽やかラブコメディ！